**【発展問題】**

①　会計基準の設定方法である帰納的アプローチと演繹的アプローチについて、それぞれメリットとデメリットを含めて説明しなさい。

帰納的アプローチとは、会計実務で行われている会計処理方法を観察し、その中から一般的または共通的なものを抽出することによって会計基準を設定する方法をいう。会計実務への適合性が高く、基準の内容を正確に理解していれば、実務家は比較的容易に会計処理することが可能であるというメリットがある。しかし、経済社会が変化するごとに、既存の会計基準では会計実務への適用が困難となり、その都度新しい会計基準の開発が必要となる。その結果、会計基準のボリュームが膨大なものとなり、基準間の理論的整合性が失われていくというデメリットが存在する。

一方、演繹的アプローチとは、会計の前提となる目的や基礎概念を最初に規定し、それらとうまく首尾一貫するように具体的な会計処理のルールを導き出す方法をいう。基本概念や前提をベースにあるべき会計基準が開発されることから、基準間の理論的整合性は保たれ、また、会計基準として、原理原則のルールのみを設定することにより、社会やルールが異なる国においても、自国の会計基準として受け入れることが容易になるというメリットがある。しかし、会計基準の適用にあたっては、基準の基本概念や目的を理解したうえで、経済的実態に応じて会計処理を判断する必要があり、会計基準に判断基準やガイドラインが存在しない場合、実務家にとってはハードルの高いものとなるデメリットが存在する。